

# の夫 私工

生徒が学びを実感できる  
授業づくり

県立井原高等学校

主幹教諭 村上

奈津子



## 1 はじめに

「音楽Ⅱ」「音楽Ⅲ」が多くの学校で一部生徒のみの開講となっている今、私が授業で対峙するほとんどの生徒にとって、「音楽Ⅰ」が学校教育の中で最後に受ける音楽の授業となる。

音楽Ⅰの目標に「生涯にわたって音楽を愛好する心情を育む」とある。音楽Ⅰが最後の教科としての位置づけならば、音楽Ⅰを通して身につけてほしいのは、生徒が将来音楽に触れたとき、それを味わうことができる知識と経験であり、さらに、生徒が将来音楽を演奏したいと思ったとき、その一歩を踏み出す手段となる技術である。

その思いを持ち始めた十数年前から、自身の作成する年間指導計画に一本の筋が通り、題材や目標学習の手立てについて、まとまりをもって考えることができるようになった。

本稿では、その一部を紹介し、自らの授業づくりについて振り返る機会とするとともに、先生方の授業実践の一助になればと考える。

## 2 音楽Ⅰの取組

### (1) 常時活動

音楽を理解し、演奏表現するために、楽譜を読む力「読譜力<sup>どくふり</sup>」は必須である。しかし、音の名前、

音の高低、リズムを楽譜から読み取る技術を身につけないまま、「耳コピ」と言われる聞いて覚えた音で音楽の授業をやり過ぎてきた生徒は多い。今年当初、本校の履修者に対して実施したアンケートの回答によると、高音部譜表、低音部譜表、リズムのどれも「読めない」と回答した生徒が26%もいた。音楽Ⅰの履修を終えた生徒が、後に好きな楽曲に出会い、その曲を演奏したいと思ったとき、読譜力は大きな手段となる。また、読譜できることが自信となり、音



常時活動ソルフェージュ

楽への関わりの積極性が高まると考える。

授業では、読譜のトレーニングとして、冒頭に「ドレミファソルフェージュ」と題した自作教材による常時活動を行っている。学期ごとに階名読み<sup>かいめい</sup>からリズムの読み書き、階名とリズムを合わせた旋律の読み書きへと発展していく。冒頭の5分ほどの活動だが、少しずつ読譜に対して積極的な姿勢が見られ、教科書教材を扱う際に、自分の力で階名を書く様子や、「耳コピ」で覚えたリズムを楽譜に書き起こす様子が見られるとその効果を実感する。

### (2) 身近な楽曲を音楽的な視点で読み解く

生徒が各自で選んだ曲についてレポートを書くという課題を長期休暇に課している。生徒がジャンルを問わず、好きな曲を選曲し、その曲を好きな理由を「音楽的な視点で書く」ことに挑戦している。

最初の提出時点では、ほとんどの生徒はJ・P・O・Pなどの歌詞を伴う楽曲に対し、好きな理由に「歌詞が良い」「聴いていて気分が上がる」などを挙げ、その世界観を作り上げているはずの音楽が、何の楽器で、どんなリズムで、どんな旋律がどのように重なって、どのように繰り返され、変化しているかについての言及は少ない。生徒のレポート発表と教師の助言、解説を重ねて、レポートを書き直していくことで、音楽的な視野を広げ、生徒にとってより身近な音楽と、授業で学習した内容を結びつけて考えることができるようになる。

### (3) 演奏評価は動画&ループリック評価で

1人1台端末が整備され、演奏実技の評価方法が大きく変化した。あらかじめ評価の観点と基準を明記したループリックを示すことで、何がどの程度できるよう

になることを求めているかを明確に示せるようになった。生徒は目標を把握し、自身の端末で録画した演奏動画のうち、最も良いものをClassroomで提出する。教師は何度も見返しながらこれまでよりも丁寧に、なおかつ短い時間で評価することができるようになった。



動画のループリック評価

さらに、観点ごとの評価を返却することができるため、生徒にとって納得感があり、自身の学びを明確に認識することができる。

### (4) 式典演奏は特別

音楽の授業でしか味わえないことの一つに、他者と声を合わせる合唱がある。音楽が元来「伝える」という目的を持っているとしたら、卒業式という厳粛な場で思いを込めた合唱を卒業生に伝えることは、これ以上ない特別な音楽の学



卒業式合唱

びの舞台である。生徒にとって3年生を思い浮かべ選曲した合唱曲を、時間をかけて作っていく経験は、これが最後かもしれない思いながら、一年間の学びのまとめとして3学期に配置している。わずか一年ではあるが、学びの蓄積を実感し、クラスメイトと声を合わせ、ハーモニーを作る面白さを実感して欲しいと願っている。

## 3 おわりに

生徒を取り巻く環境は年々変化している。AIによって音楽に合わせた画像や、入力したプロンプトに合わせた音楽が簡単に自動生成される時代において、自身の身体で生み出す音楽や、音楽によって呼び起こされる自身の感情は唯一無二である。生徒にとってそれを味わった経験が、学びの成果として実感され、生涯にわたる音楽との関わり方に生きる授業を今後も目指していきたい。